

Ⅲ 現代の若者の職業としての漁業に関する意識調査

目次

| | |
|---------------------------|-----|
| A 調査の概要（第1編、第2編共通） | |
| 1 調査の目的 | 93 |
| 2 調査方法 | 93 |
| B 一般高校及び一般大学に在学する若者の意識調査 | |
| 1 生徒・学生の属性 | 94 |
| 2 進路の選択 | 94 |
| 3 海事経験や漁業等についての知識 | 96 |
| 4 船員職業について | 97 |
| C 水産高校及び水産系大学に在学する若者の意識調査 | |
| 1 生徒・学生の属性 | 98 |
| 2 進路の選択 | 99 |
| 3 海事・漁業等の認識 | 100 |
| 4 船員職業選択について | 101 |
| D まとめ | |
| 1 一般高校及び一般大学に在学する若者の意識 | 104 |
| 2 水産高校及び水産系大学に在学する若者の意識 | 105 |

A 調査の概要

1 調査の目的

漁業における若年労働力不足の問題は、その後継者問題等とともに、年々深刻な課題としてクローズアップされている。

従来多くの漁船船員を輩出した地域においても地元水産高校などが様々な改革を行いつつ生徒の確保に努めているが、そうした中であっても、実際に漁船船員になる者は極めて少ない状況である。このような状

況から若手漁船船員の確保を考える場合に、これまでの漁船船員給源地にだけ志向したアプローチだけではなく、一般の若者を含め広く若年労働力を優秀で抱負に富んだ漁船船員の給源として捉える必要性が生じていると言えるだろう。

この調査研究は、平成2年度と平成3年度に行われた「船員職業に関する意識調査」の結果との比較を念頭におきながら、調査の対象を水産高校などの生徒のみならず、一般高校あるいは大学に在籍する若者にも広げ、現在の若者にとって、果たして「漁業」とはどのようなイメージで捉えられているのか、あるいは職業としてどのように捉えられているのかという点等を明らかにし、優秀な若手漁船船員の確保という課題に対して、その基礎資料を得ることを目的とするものである。

2 調査方法

a 調査対象・配布回収

調査対象者は、宮城県、神奈川県、静岡県各の各高校に連絡し、対象者数を決めた上で、配布した。大学生については、4校とも東京及びその近県に位置した大学に籍を置く学生である。

調査票は、一般系調査票、水産系調査票とも調査対象校に該当数を送付した上、学生・生徒への配票、実施、回収は担当の教職員に依頼し、平成12年10月下旬から12月中旬の間に適宜実施した。

回収された調査票のうち、高校と大学を

合わせ、一般系調査として657通を、水産系調査として413通を、それぞれ有効票として集計に用いた。

表1 配布対象と人数（高校2年生）

| | 一般高校 | 水産高校 | 合計数(人) |
|--------|------|------|--------|
| 宮城県 | 1校 | 2校 | 291 |
| 神奈川県 | 1校 | 1校 | 187 |
| 静岡県 | 1校 | 1校 | 141 |
| 合計数(人) | 295 | 324 | 619 |

表2 配布対象と人数

(大学生、学年は統一されていない)

| | 一般大学 | 水産系大学 | 合計数(人) |
|--------|------|-------|--------|
| 文科系 | 1校 | | 135 |
| 理科系 | 2校 | 1校 | 318 |
| 合計数(人) | 370 | 92 | 453 |

B 一般高校及び一般大学に在学する若者の意識調査

1 生徒・学生の属性

a 男女の別

全体では、男子が55.1%、女子が43.4%であった。高校では、男子が43.9%、女子が56.1%である。大学では、男子が63.8%、女子が33.5%である。

b 兄弟姉妹の数

兄弟の数では、「いない」という一人っ子が39.9%を占め、1人が38.4%、2人が17.0%、3人以上は4.3%である。大学生は文科系、理科系とも4割以上が一人っ子であった。

c 続柄

長男が40.6%、長女が30.4%となり、兄弟姉妹の数を反映している。

d 保護者

全体では、父親が保護者という回答は92.5%、母親は6.2%であった。

e 保護者の仕事

全体では、「専門・技術的な仕事」が25.6%で最も多く、次いで「管理的な仕事」が13.9%、「事務の仕事」が10.7%、「サービスの仕事」が9.4%、「工場、建設の仕事」が8.8%、「販売の仕事」が8.4%といったところである。「水産の仕事」は1.8%、「海運の仕事」は0.8%であった。宮城ではやはり「水産の仕事」の比率が男子で12.8%、女子で4.1%と高くなっている。

g 出身地

高校生については配布先によって把握されたとおりである。大学生については、男子では、東京が23.3%、千葉が20.3%、埼玉14.8%、神奈川14.8%が多く、女子は、東京が22.6%、神奈川が17.7%、千葉が14.5%となっている。

h 船員の知り合い

親しい人や身近な人の中に、船員だったり、現在船員の人がいるかどうかという質問に対して、最も多い回答は、「友人・知人」(13.2%)で、次いで「親戚」(12.5%)、「近所の人」(11.7%)である。

宮城がどの項目についても最も多い比率となっている。

2 進路の選択

a あこがれた職業と将来希望する職業

(1) あこがれた職業

今までにあこがれた職業に対する回答で、3パーセント以上のものを列挙すると、「スポーツ選手・レーサー」(10.8%)、「映画関係

・タレント」(5.3%)、「教師」(4.9%)、「音楽関係」(4.7%)、「保母・保育士」(4.6%)、「美容師・ネイル関係」(4.0%)、「スチュワート・スチュワート」(3.3%)、「警察・消防士・自衛官」(3.2%)、「医師」(3.2%)、「建築・デザイナー」(3.2%)、「科学者・研究者」(3.2%)、「パイロット」(3.0%)である。

大学生の男子は文系・理工系とも「スポーツ選手・レーサー」の比率が全体平均の2倍以上と高い。文系の男子は「医師」(13.0%)の比率が高い。理系の女子では「建築・デザイナー」と「スチュワート・スチュワート」の比率がそれぞれ14.3%と高い。また、大学生の文系を除くと、高校も含め、男子より女子の方が「教師」の比率は高いようである。

高校別で特徴が見られるのは、神奈川の女子は「美容師・ネイル関係」が23.8%と高い。静岡は男女とも「科学者・研究者」がそれぞれ10.2%、8.0%と高くなっている。また静岡の女子は「スチュワート・スチュワート」(12.0%)と高い。

(2) 希望の職業

現時点で将来つきたいと考えている職業について見ると、3パーセント以上の比率のものには「コンピュータ・プログラマー・SE関係」(8.8%)、「サラマン・銀行・事務職」(5.5%)、「公務員・官僚」(4.9%)、「エンジニア」(3.7%)、「福祉関係」(3.3%)、「教師」(3.2%)、「マスコミ関係」(3.0%)となる。無回答は20.7%であった。

学校別男女別で見ると、宮城の男子では、「警察・消防士・自衛官」(12.8%)、「公務員・官僚」(10.6%)、「音楽関係・ミュージシャン」(6.4%)が比率の高い職業である。同女子

では、「教師」(8.2%)、「看護婦」(15.1%)、「美容師・ネイル関係」(6.8%)、「薬剤師・歯科技工士・栄養士」(5.5%)が高い。神奈川の男子では、「映画関係・タレント」(6.7%)、「美容師・ネイル関係」(6.7%)が高いのが特徴である。同女子では、「保母・保育士」(15.9%)、「福祉関係」(11.1%)、「デパート等販売関係」(7.9%)が高い。静岡の男子は「スポーツ選手・レーサー」(6.1%)、「薬剤師・歯科技工士・栄養士」(5.5%)、「臨床検査技師」(4.1%)が高い。同女子では、「教師」(12.0%)、「看護婦」(12.0%)「薬剤師・歯科技工士・栄養士」(16.0%)、「医療関係」(24.0%)が高くなっている。

大学文系では男女とも、「司法関係」(男4.3%、女3.2%)、「マスコミ関係」(17.4%、9.7%)が高い。それ以外には、男子で「車・オートバイ関係」(8.7%)、「旅行会社」(8.7%)、「広告・出版関係」(13.0%)、女子では「翻訳・通訳・外国語使用」(9.7%)、「スチュワート・スチュワート」(5.4%)、「福祉関係」(10.8%)がそれぞれ高い。大学理工系では、男女とも、「コンピュータ・プログラマー・SE関係」(19.4%、1.1%)が高い。男子では「エンジニア」(10.0%)が若干高いようである。

b 希望の進路

卒業後の進路について、高校では神奈川を除き80%以上が「進学」、大学では理科系で10%以上が「進学」と答えている。高校の神奈川と大学では「まだ決めていない」という割合が20%以上ある。

高校生と大学生の進学希望者に対して、進学の際の専攻について質問した。

高校生は、全体としては、「国公立の理

工科系大学」が最も高く31.3%、次いで「専修・専門学校」が21.6%、「私立の文科系大学」が18.8%である。また、進学先の学校の所在地としては「県内」が51.4%、「県外」は37.5%である。一般高校の静岡では、男女とも「国公立の理工科系」が70%以上という目立った回答である。

大学生は総数が少ない上、理工系が進学希望者34人中の24人を占めているせいもあって、「国公立の理工科系大学院」が52.9%と最も多い。進学先の地域も「県内」の20.6%に対して、「県外」は67.6%である。

c 就職の際に重視する項目

就職する会社を選ぶ際にどのようなことを重視しているか、それを3つまで選んでもらった。

比率の高い順に「仕事が自分の性格にあっている」64.2%、「将来性がある」42.8%、「経営が安定している」32.3%、「初任給や給与が高い」28.0%、「事業内容に興味がある」27.4%、「通勤に都合がよい」27.2%と続いている。

学校別では、宮城県の一般高校男子では、「経営の安定」が48.9%と高い。神奈川県的一般高校女子は「通勤に都合がよい」が52.4%と高い。また、大学文系の「海外勤務の機会」32.3%や「事業内容に興味がある」44.1%の比率が高い点に特徴が見られ

d 進路の相談相手とその程度

父親、母親、友人、先生に対して進学や就職を決める際に、どの程度相談するかを質問した。「必ず相談」する相手としては、父親が37.9%、母親が53.9%、友人が26.5%、

先生が16.0%で、母親、父親、友人、先生の順になっている。

学校別では、大学文系の女子は父親、母親、友人の比率が、それぞれ、58.1%、80.6%、36.6%と高くなっている。

3 海事経験や漁業等についての知識

a 海への興味や魅力

海にどのような興味や魅力を感じていますかという質問に対して、最も多い回答は「おおらかさを感じる」(37.4%)であった。以下、「ロマンを感じる」(21.8%)、「男らしさを感じる」(11.0%)、「親しみを感じる」(10.2%)と続いている。男女で見ると、女子の方が男子よりも「おおらかさを感じる」の割合が高い。

b 海事経験

船舶や港に対する体験について質問した。「乗ったことがある」とか「見学したことがある」といった肯定的な回答の最も多い項目は、「旅客船・遊覧船(「乗ったことがある」と「見学したことがある」の合算比率で84.6%、以下同じ)である。次いで、

「フェリー」が72.1%、「釣り船」が44.3%、「漁船」が24.4%、「タンカー」が19.9%である。

施設については、「大きな工場」や「小さな工場」の見学したことがあるという回答が4割前後であるのに対して、「漁港」や「魚市場」に行ってみたことがあるという回答は6割に及んでいる。

学校別では、一般高校の神奈川の場合、他の一般高校よりも肯定的な回答の比率が低いようである。

c 漁業や漁船船員に関する知識や関心

22の項目を挙げて、関心があったり、

知っているものを3つ選んでもらった。最も回答率の高い項目は、「自然や環境の保護」(44.6%)で、次は、「国際的な200海里漁業問題」(43.2%)である。この2つについては半数近くの若者が何らかの知識や関心を持っていることになる。「捕鯨の規制」は35.8%で、比率の高さは3番目である。以下、1割以上の回答率の項目を挙げると、「バイオ(生物)技術の最先端」(21.6%)、「航海の長い漁船の生活」(19.3%)、「魚などの資源を増やし育てる漁業」(16.0%)、「仕事を離れる漁船船員」(11.3%)、「漁船船員は夜間働くことが多い」(10.8%)といったところである。逆に、回答率の低い項目は、「日本の漁業には希望がある」(0.9%)、「日本船籍漁船のF O C (便宜置籍船)化」(1.7%)、「漁船船員の給料は安い」(2.3%)、「漁場を総合的に開発していく技術」(2.4%)、「漁業資源を管理する管理型漁業」(3.5%)といったところである。

漁船船員の給料については「高い」が8.5%、「安い」が2.3%で、「高い」という認識の方が多いようである。混乗船についての知識をたずねる「日本の漁船に乗り組む外国人船員」という項目は4.3%である。一般高校の宮城と神奈川の女子のこの項目に対する比率が高い。一般高校の静岡ではこの項目の回答者がほとんどいないのが、意外である。

「200海里」や「捕鯨規制」については、大学の文系の方が高校生や大学の理系の学生よりも関心や知識が多いようである。

「漁船に乗り組む船員が少ない」の項目は

全体としては9.6%であるが、高校大学別で見ると、高校生の方が比率が高いようである(一般高校の神奈川の男子を除く)。

「漁船船員は夜間働くことが多い」では、一般高校静岡の女子と大学文系の女子の比率が低い。

4 船員職業について

a 一般学校在籍者の漁船船員への志向性

今までに漁船に乗り組む船員になりたいと思ったことがありますかという質問に対して、「ぜひ漁船の船員になってみたいと思ったことがある」、「一度は漁船の船員になってみたいと思ったことがある」、「漁船の船員になってみたいと思ったことがある」という、漁船船員になることに肯定的な回答を合わせて「思ったことがある」とすると、全体的には、「思ったことがある」という肯定派は12.9%、「思ったことはない」という否定派は84.3%である。

学校別・男女別で見ると、高校男子では「思ったことがある」は24.6%、女子では2.6%、大学の男子では16.9%、女子では3.2%である。一般高校で、静岡の男子の場合、肯定派の比率が30.6%と高いのが注目される。

b 転職と漁業

(1) 一度就職した後、転職すると仮定した場合、どのような点に注意して次の仕事を選びますかという質問に対して、10項目の中から重要な項目を3つ選んでもらった。50パーセント以上の回答率の項目は、「収入の多さ」(53.4%)、「自分の生きがい」(61.9%)、「仕事のやりがい」(66.2%)の3つである。20パーセント以上では「休暇の多

さ」(21.0%)、「自由に時間を使える」(26.2%)、「家族と多くの時間をもてる点」(27.2%)の3つである。10%に満たない項目は、「自営的な仕事であること」(4.6%)、「何らかの形で自然と触れあえる仕事であること」(8.1%)、「環境汚染のない場所で生活できる点」(6.8%)の3つである。

「仕事のやりがい」については、一般高校、大学を問わず、男子よりも女子の方の比率が高いようである。逆に、「家族と多くの時間をもてる点」については、一般高校、大学を問わず、女子よりも男子の方の比率が高いようである。男子が仕事よりも家族や家庭に目を向けはじめ、女子は逆に社会や職業に目を向けはじめている近年の社会的動向を映し出しているようにも思われる。

(2) 転職する場合、漁業に従事することは選択肢の1つとして考えられるかという質問に対して、「考えられる」は10.8%、「考えられない」は78.2%である。一般高校静岡の男子は22.4%、また大学理工系の男子も16.6%と比較的高い比率である。

(3) 転職先として漁業が選択肢にならない大部分の若者に、選択肢として考えられない理由を12の項目の中から3つ選んでもらった。

比率の高い理由項目から挙げると、「漁業については考えたこともない」(57.4%)、「漁業のことがよくわからない」(44.1%)、「船に酔う」(43.4%)、「仕事が危険だと思う」(40.4%)といった項目となる。2割程度の若者は、「家族と長い間離れている

ことはできない」(21.3%)、「漁業の将来性に期待できない」(20.9%)、「漁業のイメージが悪い」(15.7%)といった項目を挙げている。

学校別・男女別では、高校男子では「漁業の将来性に期待できない」が30.9%と高い。大学の男子では「漁業がよくわからない」が49.2%とやや高い。「考えたこともない」という項目は、高校、大学とも、当然ながら、男子よりも女子に多い。

C 水産高校及び水産系大学に在学する若者の意識調査

1 生徒・学生の属性

a 男女の別

全体では、男子が82.6%、女子が17.4%である。水産高校では、男子が90.3%、女子が9.7%である。水産系大学では、男子が55.4%、女子が44.6%である。

b 兄弟姉妹の数

兄弟の数で、いないというのは21.3%、1人が40.4%、2人が26.4%である。姉妹については、いないが38.3%、1人は42.1%、2人は15.7%である。

c 続柄

長男が47.0%、次男が28.3%、長女は9.7%、次女6.8%であった。

d 保護者の仕事

全体では、1割以上の回答があったのは、「専門・技術的な仕事」が20.6%、「水産の仕事」が14.5%、「工場、建設の仕事」が12.6%である。学校別には、高校の宮城では、地域性を反映してか、男子・女子と

も「水産の仕事」の比率がそれぞれ25.0%、50.0%と高くなっている。静岡では「工場、建設の仕事」が男女ともそれぞれ27.3%、33.3%と高い。大学の女子では、「専門・技術的な仕事」(41.5%)の比率が高いという特徴が見られる。

d 出身地

大学生のみを記すと、男子は、神奈川県が23.5%、東京が11.8%、以下、北海道7.8%、千葉5.9%、女子では、東京が26.8%、神奈川県が22.0%、以下、千葉14.6%、北海道4.9%であった。

e 船員関係者の知り合い

船員の知り合いがいる(いた)という比率が一番高いのは、「近所の人」で33.2%、続いて「親戚」が32.2%、「友人・知人」が29.5%となる。「祖父」や「父親」は2割程度であったが、全国レベルから見れば、非常に高い比率である。

学校別に見ると、宮城県の水産高校は、地域性を映し出して、「祖父」から「近所の人」に至るまで、船員である(あった)という比率が高くなっている。

f あこがれた職業と将来希望する職業

(1) あこがれた職業

今までにあこがれたことのある職業についての回答を見ると、まず、無回答が3.2%と4分の1以上あった。この比率の全てがあこがれた職業がないという回答を必ずしも表しているわけではないが、かなり高い比率である。2パーセント以上の回答があった職業は、「スポーツ選手・レーサー」(8.7%)、「船員」(4.8%)、「漁船船員」(4.1%)、「警察・消防士・自衛官」(4.1%)、

「映画関係・タレント」(3.1%)、「公務員・官僚」(2.4%)、「大工・とび職」(2.4%)、「美容師・ネイル関係」(2.4%)といったところである。船員と漁船船員を合わせると8.9%である。「船員」については、大学生の男女がそれぞれ5.9%、9.8%と高い。「漁船船員」では、神奈川の水産高校と大学生の男子が、それぞれ8.0%、5.9%と高いのが目につく。

(2) 将来希望する職業

次に、現在どのような職業に就きたいかをたずねると、2%以上の回答があった職業は、「船員」(9.2%)、「水産・養殖関係」(5.1%)、「漁船船員」(4.8%)、「公務員・官僚」(3.6%)、「自動車・オートバイ整備関係」(3.4%)、「サラリーマン・銀行・事務職」(2.9%)、「コンピュータ・プログラマー・SE関係」(2.9%)、「科学者・研究者」(2.4%)、「音楽関係・ミュージシャン」(2.2%)、「車・オートバイ関係」(2.2%)である。船員や水産関係の比率の高さが目につく。無回答は27.4%であった。「船員」については大学生の男女の比率がそれぞれ17.6%、17.1%と、高校生よりも、またあこがれた職業における比率よりも、一段と高くなっている。

2 進路の選択

a 進路選択

全体で見ると、「進学」が34.6%、「就職」が51.3%、「まだ決めていない」というのが12.8%という結果である。

学校別では、水産系大学では、男女とも進学の比率が高い。

具体的な進学先としては、高校生の場合、「専修・専門学校」が44.4%で最も多く、

「専攻科」が20.0%で後に続いている。大学進学を考えているものは、1%から7%未満であった。

水産系大学生の場合は、「専攻科」が81.1%を占めている。「専攻科」への進学は男子よりも女子の方が比率が高い。

また、進学先の地域は、水産高校では県内が60.0%、県外は31.1%となり、県内が県外の倍の割合となっている。水産系の大学では、県内が47.2%、県外が35.8%で、県内の比率はかなり低くなっている。

h 就職の際に重視する項目

会社を選ぶ際に重視する項目として、3人に1人以上が挙げているものは、「仕事が自分の性格にあっている」58.8%、「将来性がある」47.2%、「経営が安定している」36.8%、「初任給や給与が高い」35.4%である。

学校別では、宮城と静岡の水産高校の男子で「初任給や給与が高い」の比率がそれぞれ45.0%、41.8%とやや高くなっている。また、水産系大学の女子は「仕事が自分の性格にあっている」の比率が80.5%とかなり高い。

3 海事・漁業の認識

a 海への興味や魅力

海についてどのような興味や魅力を感じているかをたずねたところ、「おおらかさを感じる」が22.0%、「親しみを感じる」が21.1%、「ロマンを感じる」が20.8%という結果であった。

学校別では、水産系大学生の方が水産高校の生徒よりも「ロマンを感じる」という比率が高い。また、大学生の女子は「おお

らかさを感じる」という比率も高い。

b 海事経験

船や港などの乗船や見学など、海事経験について、いくつかの項目を挙げて質問をした。最も経験があった対象は、船関係では、「実習船」で91.5%（「乗ったことがある」と「見学したことがある」の比率の合算、以下同じ）、次いで、「旅客船・遊覧船」が81.1%、「釣り船」が70.5%、「フェリー」が70.0%で、「漁船」についても48.6%が乗船したことがあると回答している。

c 漁業や漁船船員に関する知識や関心

漁業や漁船船員についての22の項目の中で、4人に1人以上が回答したものを挙げると、「自然や環境の保護」(39.0%)、「捕鯨の規制」(28.8%)、「漁船船員は給料が高い」(25.9%)、「国際的な200海里漁業問題」(24.5%)となる。

学校別で見ると、「自然や環境の保護」や「捕鯨の規制」では、高校生よりも大学生の方の比率が高く、よく認知しているようである。「漁業資源を管理する管理型漁業」については、大学生では4割近くのものを知っていると回答している。逆に、「漁船船員は給料が高い」という項目については、高校生の比率が高くなっている。

一般系の調査と比べると、「日本の漁船に乗り組む外国人船員」、「漁船船員は給料が高い」、「漁船の減船」といった項目は高い比率を示しており、漁業がより身近な存在であることを示している。

専攻別で見ると、高校の海洋漁業系学科と水産工学系学科は「漁船船員は給料が高

い」がそれぞれ34.9%、35.1%と高い。情報通信系学科では「情報技術を使う漁業」が4.8%と高くなっている。大学では、海洋生産系で「国際的な200海里漁業問題」(34.7%)、「漁業資源を管理する管理型漁業」(34.7%)、「自然や環境の保護」(53.1%)、「日本船籍漁船のF O C (便宜置籍船)化」(10.2%)、「捕鯨の規制」(42.9%)といった項目の比率が比較的高くなっており、高校生に比べ、大学生の知識や関心の広さがうかがえる。

4 船員職業選択について

a 学校選択の理由

水産系の高校や大学に進学した理由の中で1割以上の比率を占める項目は、「資格を取るため」22.3%、「ただ何となく」20.1%、「水産が好きだから」10.7%、「船に乗りたいたから」10.2%である。

学校別で特徴を見ると、「資格を取る」という項目は水産系大学生の男子ではほとんどいない。女子でも4.9%である。逆に、「水産が好き」になると、男女とも、水産系大学生の方の比率がそれぞれ29.4%、19.5%と高くなる。

専攻別で特徴を見ると、高校の水産工学系学科で「学校推薦」(8.5%)、情報通信系学科では「資格を取る」(31.6%)が高い。大学では、海洋生産で「水産が好き」(24.5%)、「船に乗りたい」(18.4%)などがやや高いと言える。

b 入学当時の船員志望の程度

入学当初、どの程度船員になりたいと思っていたかをたずねると、漁船船員になりたいと思っていた人(「ぜひなりたい」と「な

ってもよい」の合計)は10.7%、商船船員になりたいと思っていた人(「ぜひなりたい」と「なってもよい」の合計)は7.5%、船員になるつもりはなかったという人は7.5%、船には乗りたくないが水産業に就職したいという人は8.2%である。水産業に就職するつもりはなかった人は36.1%もいる。また、その時点ではまだ決めていないという人が26.4%であった。

学校別で見ると、実数が少ないが、高校の女子は漁船船員になろうと思っていたという比率が高い。大学生の男子では、商船船員になりたいと思っていた人の比率が高い。また、まだ決めていないという比率も高校生よりも高いようである。

専攻別では、高校の海洋漁業系学科では漁船船員になりたいという回答が20.8%と高い。また、水産業への就職希望者も14.1%とやや高くなっている。水産工学系学科では水産業に就職するつもりはなかったという回答が45.7%もある。情報通信系学科では水産業に就職するつもりはなかったという回答は67.1%に及ぶ。大学では、海洋生産系で商船船員になりたいという回答が22.4%と高い。

c 現在の船員志望の程度等

(1) 現在の意志について見ると、漁船船員になりたいという比率は12.8%(「ぜひなりたい」と「なってもよい」の合計)で、入学時の回答とほとんど変わらない。商船船員は9.4%(「ぜひなりたい」と「なってもよい」の合計)、船員になるつもりはないは6.1%で、こちらもほとんど変化は見られない。水産業に就職は12.1%で入学時点より若干

増えている。水産業に就職するつもりはないは37.8%で、これはほとんど変化していない。まだ決めていないという人の比率は18.4%で、かなり減っており、この減少分が水産業への就職希望者を増やしていると思われる。

学校別では、水産系大学生で男子の漁船船員になりたいという人の比率が高いようである。

専攻別では、海洋漁業系学科は漁船船員になりたいという回答が21.5%、水産業に就職したいという回答が16.8%とやや高い。大学では、海洋生産系で商船船員になりたいという回答が16.4%とやや高い。

(2) 次に、現在漁船船員になりたいと思っている人に対して、今の学科を希望した理由をたずねた。

最も多い回答は「前から海・漁業の仕事にあこがれていたから」で50.9%、次いで「一般的なサラリーマンと違い、おもしろそうだと思うから」が41.5%で、「漁船船員になるための勉強がおもしろくなってきたから」や「他になりたいと思う職業が見あたらないから」はそれぞれ11.3%、「親の営む漁業経営を引き継ぐため」は7.5%である。

専攻別では、実数が少なくなるため、高校の海洋漁業系(全実数53人中の32人)のみ見ると、「前から海・漁業の仕事にあこがれていたから」(65.6%)、「一般的なサラリーマンと違いおもしろそうだと思うから」(34.4%)が同じように選ばれている。

(3) 漁船船員になるとすればどのくらい仕事を続けるかという船員継続期間については、「定年になるまで続けたい」が

26.4%、「船長や機関長になるまでは続けたい」が7.5%、「しばらくの間は続けたい」が17.0%、「なってからでなければわからない」は39.6%である。

(4) 上の質問で、「船長や機関長になるまでは・・・」、「しばらくの間は・・・」、「なってから・・・」に回答した人(実数34名)に対して、どのような条件があれば、一生の仕事にしてもよいと思うかとたずねると、「将来の家庭生活に支障がないなら一生の仕事にしてもよい」が23.5%で最も多かった。次いで、「もっと休暇がたくさん取れるようなら」が20.6%、「もっと収入が多ければ」は17.6%である。また、「どんな条件が保証されても一生の仕事としては考えていない」という回答は20.6%であった。

(4) 同じ回答者に、漁船に乗船した場合、1航海何日ぐらいが理想的かをたずねると、「3ヶ月以内」が32.4%で最も多く、「日帰り」が17.6%、「1年以内」が11.8%とつづいている。

(5) 商船の船員になりたいと回答した人(実数39名)に対して、具体的にどのような船を希望するかをたずねると、第1志望としては、「外航船の船員」が35.9%、「フェリーの船員」が23.1%、「内航の船員」が15.4%であった。第2志望になると、「内航の船員」が20.5%、「外航の船員」が12.8%、「巡視船、自衛艦の乗組員」が10.3%となった。

(6) 「まだはっきり決めていない」、「漁船船員や商船船員になるつもりはない」、「船には乗りたくないが、水産業に就職したいと思っている」、「水産業に就

職するつもりはない」に回答した人(実数307人)に対して、何故漁船船員になろうと思わないのかをたずねたところ、「前から漁船船員になろうとは思っていない」が49.2%、「他になりたいと思う職業がでてきたから」が39.4%で、他の項目を圧倒している。他では、「洋上での生活で、家庭を長く離れるから」が18.9%、「今後の日本水産業の景気が悪そうだと思うから」が12.7%で、この2つの項目が目立っている。

専攻別に特徴を見ると、高校の海洋漁業系学科では「思っていたほどおもしろい仕事ではなさそうだから」(16.3%)がやや高い。情報通信系学科は「前から漁船船員になろうとは思っていない」(71.0%)が高くなっている。大学では、海洋生産系で「洋上での生活で、家庭を長く離れるから」(37.5%)が高い比率である。

d 漁船船員になる条件

30パーセント以上の偏り（それだけ重要視していることを示す）が見られたのは、以下の項目である。

- ・「収入の面で恵まれる」(69.7%)
- ・「休暇を十分に取ることができる」(52.8%)
- ・「専門的な能力や技能が身につく」(47.2%)
- ・「上司や同僚に恵まれる」(47.0%)
- ・「能力発揮の機会が多い」(39.7%)

学校別で見ると、上の項目については、大学の女子は高校生や大学生の男子よりデルタ・パーセントの比率が高いようである。上の項目以外で、高校生と大学生との違いが見られたのは、「世のため、人のために

役立っていると実感できる」という項目で、大学生は高校生よりもかなりデルタ・パーセントの比率が高い。また、「世界や国内の色々な港を訪れる」、「様々な人々に出会える」、「上司や同僚に恵まれる」といった項目も大学生の女子のデルタ・パーセントの比率が高く、重要視しているようである。

専攻別で特徴を見ると、水産高校では、海洋漁業系で「収入の面で恵まれる」が75.8%でやや高い。水産工学系学科では、「休暇を十分に取ることができる」が62.8%と高い。大学では、海洋生産系で、「専門的な能力や技能が身につく」(59.2%)、「上司や同僚に恵まれる」(63.3%)、「能力発揮の機会が多い」(67.3%)、「世のため、人のために役立っていると実感できる」(38.8%)、「休暇を十分に取ることができる」(67.3%)となっており、高校生の回答に社会性が加味されたような内容となっている。

e 漁船船員になる際の気がかりな点

同じ仮定の下で、どのようなことが気がかりになるかを質問した。デルタ・パーセントをとると、14項目中10項目で40%以上の偏りが見られた。その中で、50%以上の偏りが見られたのは、以下の項目である。

- ・「家庭生活に恵まれるだろうか」(64.4%)
- ・「船内での人間関係をうまくやっていけるだろうか」(62.7%)
- ・「雇用が安定した状態であるだろうか」(59.8%)
- ・「やりがいをもって仕事ができるだろうか」(55.2%)

・「仕事や技術をマスターできるだろうか」(53.5%)

f 到達したい職位

漁船船員になるとしたら、どの職位まで到達したいかをたずねたところ、「船長」が34.6%、「一等航海士」が15.7%、「漁労長」が12.4%、「機関長」が8.6%となった。

学校別で見ると、水産系大学の男子の方が高校生よりも、船長や漁労長と回答する比率が高いようである。

D まとめ

1 一般高校及び一般大学に在学する

若者の意識

今回の調査は、若手漁船船員の確保という目的に照らして、まず、現在の10歳代後半から20歳代前半の若者が職業一般に対して、また漁業に対してどのような意識を抱いているのかを探ろうとした。その際、平成2年度あるいは平成3年度に行った同種の調査との比較を念頭におきながら、記述を進めてきた。一般系の調査結果では、自己認知(Q7)については、水産系の調査結果を比べ、概ねどの項目でも、一般高校及び一般系大学在学者の方が、水産高校及び水産系大学在学者よりも、自己認知についての自信の程度が低いと言える。このことは、水産系の学校の場合、職業的な教科内容や実習などを通して、学校での日常生活経験の中で、自己についての肯定的な認知が形成されやすくなる面があると考えられることができるだろう。

希望する職業と船員職業についての評価

(Q19)の結果からは、いわゆる「3K」職場に対する否定的な評価があらためて確認されたが、希望する職業について、「この職業は、日曜や休日に休めるとは限らない」の項目が肯定的に評価されているのは意外であった。船員職業の評価について、「適性」と「能力の発揮」の2つ項目が否定的に評価されているのは、平成3年度の結果と同じであった。希望職業では、この2項目が肯定的に評価されており、希望職業の評価と船員職業の評価で、この2項目は正反対に分かれている。適性があるとか能力が発揮できるからということで、ある職業を選択するという事は極めて規範的な回答と考えられるが、重要なのは本人が何をもちって当該職業の適性と考え、能力と考えているかであろう。初職選択時における職業イメージの果たす役割の大きさ(『現代若者の職業意識』労働省職業安定局編、平成3年)を考えると、イメージが湧きにくい、あるいはネガティブなイメージで捉えられている職業に対しては、適性や能力の発揮といったことについては端から否定的に捉えられてしまうのではないだろうか。漁船船員に対するイメージは「地味で、きびしく、古めかしく、遠い存在のイメージと強く、活発で、迅速なイメージを合わせ持っている」と記したが、この形容詞で綴られるイメージをどのようにポジティブな内容にかえていくか、単なる広報活動のみならず、そのための様々な方策が、これまで以上に、求められている。

一般高校に在籍している男子生徒でこれまで漁船船員に一度でもなりたいたと思った

ことがある割合は25パーセントで、この割合は平成3年度の結果と変わらなかった。このことは、潜在的には、一般の学校の中でも漁船船員のなり手が存在していると考えられることを示している。また、自己認知についての質問項目の中で、船員に向いているという回答が1割程度存在することを考えると、漁業に供給しうる潜在的な人材は、必ずしも悲観的な数ではないのかも知れない。重要なのはこうした人材を吸収できる

2 水産高校及び水産系大学に在学する若者の意識

ここでは、漁船船員を志向している若者について、簡単にまとめておくことにする。

まず、自己認知(Q8)についてだが、水産系学校の生徒・学生の結果は、今年度の一般系調査の結果と比べても、また平成2年度の調査(水産高校、水産系大学)と比べても、自己認知に対する自信の程度が最も高いという特徴が見られた。

このような若者のうち、およそ2割程度が船員職業に対して「向いている」と回答している(Q8)。そして、現在、漁船船員になることに肯定的なものは約1割であった(Q22)。また、この割合は平成3年度の調査結果と比べてもほとんど変化していなかった。

漁船船員を志向している若者の場合、「前からのあこがれ」や「サラリーマンと違い、おもしろそう」だという肯定的な評価が、現在在学している学科を選ばせている。今年度の調査では、家業として漁業をつぐという回答は少なかった。

漁船船員になった場合の定着の度合いを

見ると、平成2年度の調査結果と比べて、定着の度合いがやや低くなり、逆に非定着の度合いが高くなっている。陸上職についてよく言われているように、同一企業で職業生涯を全うしようとする意識が低下しているという若年者の転職志向の高まりに呼応していると考えられる。

彼らが一生の仕事として漁船船員を全うするとした場合の条件として、今回の調査で特徴的だったのは、上級職に就けることに代わって休暇の取得が挙げられている点である。平成2年度の調査結果では船長や機関長になれるならという回答が多く見られたが、それが可処分時間の取得に取って代わられている。組織に対して心理的距離をとり、個人生活をより重視するという傾向がやはり顕著に見られる。その点は、理想的な乗船サイクルで、「日帰り」が、平成2年度の結果と比べ、著しく増加していることとも関連があると思われる。

職業としての漁業に目を向けようとする潜在的な若年層を確保していくためには、若者の職業志向とマッチさせる様々な体制を模索しながら、積極的に漁業あるいは漁船船員の持つ職業的な魅力をアピールする努力をこれまで以上に行う必要があると思われる。

(本稿は「現代の若者の職業としての漁業に関する意識調査」担当:金崎一郎、久宗周二の要約である。)